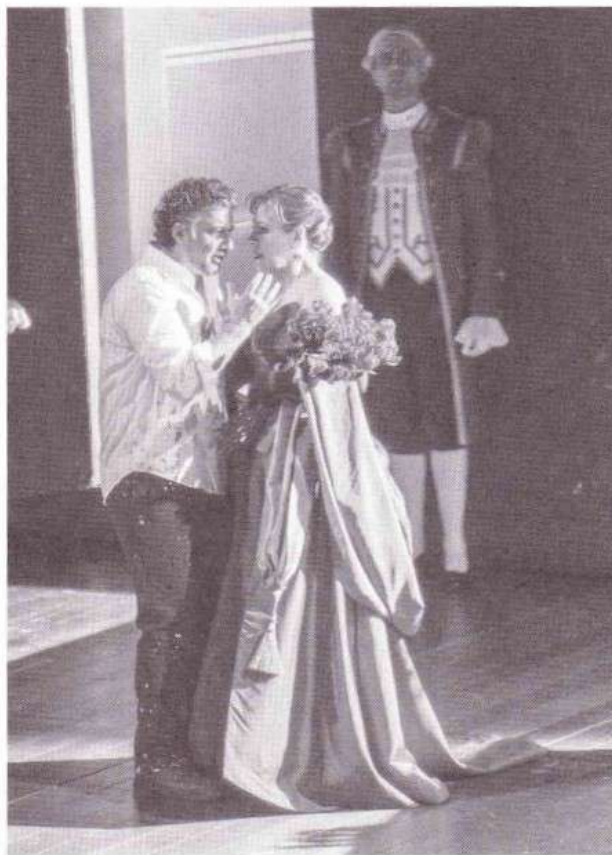


チューリヒ歌劇場に 帰ってきたカウフマン

かつてチューリヒ歌劇場で研鑽を積み、2009年ロバート・カーセン新演出時のブッチーニ《トスカ》でもカヴァラドッシを歌っていたヨナス・カウフマンが久しぶりに当劇場に帰ってくるとあって、12月15日の客席は特別な熱気を帯びていた。リハーサルは年末年始に同役を歌うユシフ・エイヴァゾフに任せていたと聞き、幕が上がるまで不安だったが、落ちていてじっくりアリア《妙なる調和》を歌うのを聴いてようやく安心した。トスカのソンドラ・ラドヴァノフスキーは以前聴いたときに音程がぶら下がり聴き苦しかったので期待していなかったが、今回はアリアの最高音から下がる時に危なかった以外はうまく解決していた。アリアの歌い出しは音程が迷ったものの、ドラマティックに鳴らす胸声はしっかりとまって満足感が高い。細かい所作がコミカルになりすぎる傾向があるカウフマンにつられてか、第1幕は重い悲劇の予感が皆無に進んだが、プリン・ターフェルのスカルピアが流れを変えた。先シーズンのヴェルディ《ファルスタッフ》同様、ターフェルなりのイタリア語発声法を確立したようで、イタリア的な明るい母音を上手く利用して共鳴区を中心にピンと当てた声は、近年のスカルピア歌いからは容易に聴かれない迫力がある。3人で演出の矛盾点も細やかな演技で解決させながら、ドラマはどんどん熱していき、「Vittoria!」と叫ぶカウフマンが興奮の頂点となった。ジャンンドレア・ノセタの指揮も上手く歌手の長所を引き出し、最後まで満足感が上昇していく《トスカ》は久しぶりだった。

今月の新演出は12月4日に初日を迎えたカヴァッリ《エリオガバロ》だったが、すっかり影が薄くなってしまう。カリスト・ビエイトの演出は「未成年お断り」で、レイブ・シーンが繰り返されることへの不快感や、演ずる側に対する哀れみの声が多く聞かれた。そのためだろうか、ファトマ・サイードが予定されていたジェンミラ役はアンナ・エル・カシエムに代わった。題名役のカウンターテナー、ユーリ・ミネン



チューリヒ歌劇場で《トスカ》のカヴァラドッシを歌ったカウフマン（左）とトスカを歌ったラドヴァノフスキー（右） © Toni Suter

ツォ・スカレーラに支えられながら、あいかわらず満席の観客を満足させた。最初はイタリア歌曲でおとなしく始め、ロッシーニ《老齢の罪》のアリア「独り」、「距離」、そして最後は《チエネレントラ》からラミローのアリアを歌って会場を沸かせた。敏捷な声帯の動きの準備体操後、後半はベルカントもので高音を伸ばす。ベッリーニ《清教徒》で声のポジションを上げ、フランス語で歌うドニゼッティのオペラは声を鼻

コ、ジュリアーノ役のベス・テイラー、レニア役のマーク・ミルホーファー、アレックス・サンドロ役のデイヴィッド・ハンセンなど歌手陣のレヴェルは高かった。ラ・シンティッラを指揮するドミトリー・シンコフスキは、休憩のあと、指揮台で突然、結んだ長髪を解き、立派なカウンターテナーとしてアリアを歌って観客を驚かせた。12月5日はファン・デ・エゴ・フロレスのリサイタルで、ピアノのヴィンチェン

に集める。もう1曲は歌わず、すぐにヴェルディへ。このところよく歌う《2人のフオスカリ》のカヴァティーナだけで大拍手、続けてカバレッタで拍手喝采を浴びた。最後はブッチーニ《妖精ウィッリ》、そして盛りだくさんのアンコールも定番となっている。ギターを抱えてカンツォーネやペルーの歌を歌い、巧みなスピーチも挟んで聴衆を笑わせる。マスネの《ウェルテル》では泣かせ、最後はレハール《微笑みの国》

から《君はわが心のすべて》とブッチーニ《トウランドット》から《誰も寝てはならぬ》でおなじみの終幕となった。

座って指揮する ブロムシュテット

現役最長老の指揮者ヘルベルト・ブロムシュテットは、夏まで普通に立って指揮していたのだが、12月9日のトーンハレで行われたチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の公演では楽団員に紛れて登場し、座ったままで指揮する姿に驚かされた。しかしシューベルト「交響曲第4番」が始まると生き生きとし、楽団員の集中力も湧く。穏やかな第2楽章、変拍子が印象的に光ったパワフルな第3、4楽章はせつないドラマの影らませかたや力を抜くさじ加減が匠の技だった。後半は同郷の作曲家フランツ・ベルワルトの「交響曲第2番」を取り上げ、座ったままでもエネルギーにアゴギック（緩急）とデユナミク（強弱）を駆使して頂点に達した。カーテン・コールも座ったまま、それでも元気に拍手を送る巨匠と、共演できる一瞬一瞬を愛でているような団員の敬愛に包まれた感動的な一夜であった。ダニエル・ホープを音楽監督に迎えてから大きく発展したチューリヒ室内管弦楽団が、先月から続くヴォルフガング・リームの70歳記念イヤーで注目を集めている。トーンハレで12月13日に彼らの「リーム&シューベルト」を聴いた。「大好きなシューベルトの曲と組めるように同じ編成にした」というリーム「エピソード」を、シューベルト「5つのドイツ舞曲」と「ヴァイオリンと弦楽オーケストラのためのロンド」で挟み、後半はマラー「編曲版《死と乙女》」を劇的に演奏した。